



Title	語の多義性について : 動詞「つく」を例として
Author(s)	大鹿, 薫久
Citation	語文. 1979, 36, p. 20-32
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68660
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

語の多義性について

——動詞「つく」を例として——

大 鹿 薫 久

1. 意味の異同 I

「学校」という語は普通、単義のように思われるが⁽¹⁾

1 この学校は明治四〇年にたてられた

2 病気で学校をやめます

3 学校を出てから十年たった

4 もうすぐ学校につきます

というように例文をならべてみると、簡単に単義だと決めるのがためらわれる。1は／たてもの／、2は／授業／、3は／組織／、4は／場所／というように考えることが可能だからである。1と4の「学校」の意味をもっと抽象すれば一つの意味としてまとめられるという立場もあろう。多義語というとき、一つの語形がいくつかの意味と結びつくものをいうが、その一つ一つの意味のわけ方がすぐに問題になる。

宮島達夫(1972)はその精緻な記述の始めに、多義語の処理について次のように述べる。

いまのところ、一つの意味であるか、それとも二つの意味に分けるべきかということについての基準が立たないので、ここでは

ごく常識的に考えて処理することにする。

事実、これに続く膨大な記述の中で、その基準について殆んど述べられるところがないが「第二部、個別的記述」の「あける」のところで

多義語の場合、文脈がなければどちらの意味かわからない。——中略——第1類と第5類（「あける」対象のちがひ。筆者注）のちがひも、文脈なしでわからないということだけならば、これと同じである。しかし多義性のばあいには、一定の場面・文脈において、そのどれにあたるものかが、わからなければならない（言語活動が成立しない）のに対し、第1と第5類のちがひは、わからなくてもよい、わからうとしても無意味である、という点が多義性とは決定的なこととなる。

と、指摘する。だとすれば「いい学校ですね」と言った場合、それが／たてもの／について言ったのか、／組織／についてなのかかわからないし、それは「わからなければならない」種類のものである。

なぜならば、あまり評判のよくない、しかしその建物が非常に立派な学校を指して、「いい学校ですね」と言えは、皮肉なのか、ほめていのかかわからず受け答えに困る。「言語活動が成立しない」ので

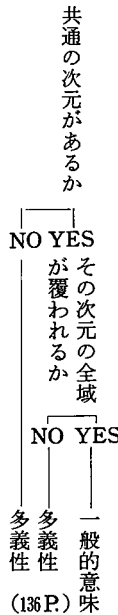
(15P)

(612P)

ある。したがって宮島説にしたがえば「学校」は多義語だということになる。

国広哲弥(1968)には「多義性識別(20P)⁽²⁾」の方法として四つの試案が提出されているが、その一つである「意味の派生的関係に基づくもの(22P)」によれば先の「学校」の1~4は「転移」あるいは「部分転用」と認められようから、やはり多義語ということになる。

また、池上嘉彦(1975)は、次のような基準を立てる。



これによれば「学校」の1~4はともに、／教育のための／という共通次元が考えられよう。けれどもその次元全域が覆われるかどうか判断がつかない。「学校」を含む用例を多く集めたとしても、判断ができる保障はない。ただ、おそらく覆われないであろうと推測される。なぜなら／教育のための／という共通次元をもつ項は非常に多くあるだろうし「学校」の1~4の別は、若干増えることがあるにせよ、それほど多くなるとは思われない。もっとも別の共通次元がたてられるのかもしれない。共通次元のたて方に問題がないわけではない。このようなわけで今のところ私にはこの基準を利用することができない。

今、三人の研究者の方法に基づいて「学校」が多義であるかどうかを判定しようとした。しかし、これらの方法の正当性はいったい何に求めるべきなのだろうか。もし、その結果を求めるべきならば、結果の正しさは、たぶん私達の言語直感・あるいは常識(common

sense)に合致するかどうかによって保障されるよりはかかない。かくして、問題は、宮島(1972)が「常識的に処理する」と述べざるを得なかったような振り出しに戻る。事実、結局のところ、多義語という場合にその中に含まれる意味の判別は、言語直感・常識によらざるをえないだろうと思われる。ただ、そのような常識や直感を言語の面から支えるような基準があるならば、常識に裏付けができるということになる。その意味で、特に国広(1968)の四つの試案などは価値あるものと言えるかもしれないが、いずれも部分的にしか適用できないし、決定的な欠点は、適用範囲が明らかでないということであろう。その点、宮島(1972)の指摘・池上(1975)の基準はかなり網羅的に扱えるだろう。「言語生活が成立しない」かどうか、あるいは「共通次元の全域が覆われるか」どうかの判断は非常に微妙なまま残されようが。

今一つ奥田靖雄(1967)をあげよう。「語彙的な意味」は文脈の中のさまざまな条件のもとに実現することを述べたものだが、逆にその条件から、意味の異同を知ることまた可能はずである。ところが、奥田(1967)のあげる条件は、意味の実現のための必要条件であって十分条件ではないので、逆の探索がうまくゆかない。たとえば「形態的にしばられ」^(167P)(3)で「つく」が／あとを追う／という意味を実現する。つまり

5 警察官についていく

のように、この意味は、「ていく」「てくる」「てあるく」「て走る」などが、接続することによって実現する。しかし、逆に「ていく」「てくる」などが接続していれば必ず／あとを追う／という意味になるわけではない。しかも5の「つく」の意味と

6 作詞の勉強のために山田先生について。

の「つく」の意味との異同は、わからない。したがって奥田(1967)の成果を逆利用することにも一定の限界があると言わざるを得ないのである。

2. 意味の異同Ⅱ

見方を変えてみよう。多義というものが発生するのは、時間の経過にもなつて転義が生じ、原義と転義が共存するからであると言われる。⁽⁴⁾しかし、転義が生ずるのはなぜか、E・A・ナイダ(1975)にすぐれた指摘がある。

ある語の意味が多岐になるのは、その語の意味がいろいろ違つた分野に用いられるからである。^(125P.)

と述べ、paper が／紙／、／新聞／、／論文／という意味をもつのは、それぞれ／紙／は sheeting, cloth, film などと同列の分野、／新聞／は magazin, journal, daily など、／論文／は article, lecture, presentation などと同列の意味分野に用いられるからだと言う。

私達が、F・ソシュール流の言語観(特に、『講義』第二編四・五章で指摘されたような、語(＝辞項)は他の語との関係において定義され、他の語との関係なしには意義が存在しない、言語の単位はいかなる場合にも他の言語単位との関係においてのみ捉えられるといういわば構造主義の根本原理的な言語観)を支持するなら、このナイダ(1975)の指摘は重要な意味をもってくるだろう。

結論的な物言いをすれば、おそらく私達がある語を多義語だと感じる(常識的に)のはある語の意味が、いくつかの異つた意味分野

に用いられるという現実上の経験に基づいていると思われる。「つく」が多義だというのは

7 電車が駅についた

の「つく」が「到着する」「行く」「来る」「帰る」などの属する意味分野に用いられ、

8 彼のひげに酒の滴がついた

の「つく」が「付着する」「くっつく」「ふれる」「密着する」などの属する意味分野に用いられているからにはかならない。意味分野が具体と抽象、変化と状態というように大きく離れていれば、語の意味の異なる度の合は大きく、一見して別の意味だと判断することができようが、意味分野が錯綜・あるいは非常に接近していると、私たちの常識は判断に窮する。

9 プラハについて三日目だというのに

10 にもつがなかなかつかないの心配した

11 頭が天井につく

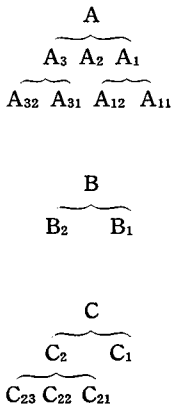
9 が「到着する」「行く」「来る」などの属する意味分野に、10 が「とどく」「はこばれる」「配られる」などの属する意味分野に、11 が「達する」「及ぶ」などが属する意味分野にそれぞれ用いられていると見るならば、9～10の「つく」は、わずかが異つた意味分野に属していることになる。このように考えてみると、9～10の「つく」はそれぞれ別の意味だと思えるが、これは決して絶対的ではない。「到着する」「とどく」「達する」が「行く」や「はこばれる」とは異なる意味分野に属することもあるのである。つまり移動の終了をあらわす意味分野である。あるいは「到着する」「来る」「とどく」などが一つの意味分野をなし、「達する」「及ぶ」などが別の意味分

野をなすこともある。これは前者が、場所から場所への移動であるのに対し後者は、広がりや伸びによる移動であるという点で意味分野の設定に差がある。

以上のように、意味分野はいつも一定してわかれているのではなく、さまざまの程度にさまざまのしかたでわかれているものなのである。それは、ある語からみれば、いろいろの意味分野に属するということであり、いろいろの意味分野というのが、単に包含関係のみによる上位から下位へのいろいろの意味分野だけではなく、隣接したものもあるのである。多義語において、その意味のわけかたが人によってちがいがあつたり、異同・同定にゆれがあつて、多義をとらえがたくしているのは、結局のところ多義語がいくつかの意味分野で用いられ、その意味分野がさまざまに設定されうるという事情によるのだと考えられる。だとすれば、多義語のいろいろの意味を固定して、意味の異同の普遍的な基準を求めること自体がもともと不可能であつたということにならないだろうか。もつとも意味分野が大きかけ離れていて、そのどちらにもある語が属する場合には、意味の異同ははっきりしているだろう。

宮島(1975)は多義語の意味のわけかたを次のように説明する。

もつとも典型的な例をとれば、多義語の意味はつぎのようなかたちでわかれるであらう。



しかし、実際には、このように単純にいかない場合がある。たとえば、 A_2 は A_1 A_3 などと共通の側面とともに B_1 ・ B_2 などBグループと共通の側面をもち、 A_3 はCグループと共通の側面をもつ、というようなものである。

この指摘は全く正しいと思う。多義語の意味を、転義による派生という観点からのみを考えれば、右の引用中の図式は正當なものであろうが、一つの語がいくつかの意味分野に用いられるという観点に立てば A_{31} と A_{11} が「共通の側面」をもつことはありうることである。

そして A_{11} と A_{12} とのあいだにはっきりと境界線が引けないばかりか A_{11} と A_3 やBとの間にすらそれができないのは、意味分野というものがさまざまに設定されうることによるのだと考えられる。

以上述べて来たことを言いなおせば、多義語の意味は、いくつかの意味分野で切り取ることができ、その切り取り方はさまざまにできるといふことであらう。

それでは、多義語の分析や記述は実際どのようなことになるのであろう。非常にすっきりしたかたちでは、多義語の意味をわけることができない。それは分析の方法が適切ではないからではなく、多義語の意味間の関係が多様だからであり、それがおそらく多義語の言語の上からの実際のすがたなのだろう。とすれば、まず、多義語が切り取られうる意味分野を明らかにすることから始めるのが適当だろう。さまざまに切り取ってみることによって多元的に記述するよりしかたがないと思われる。

(509~510 P.)

3. 意味分野と言い替え

意味分野(意味場⁽⁵⁾と訳されることもある)については今まで様々に論があるようだが、ここでは任意の一つの意味特徴を共有する意味のあつまつた分野と考えている。⁽⁶⁾この意味特徴は意味分野内での意味にとつては弁別的な意味特徴にはならないが別の意味分野の意味と比較するとき弁別的な意味特徴になる。たとえば、「主体の移動」という意味特徴でまとめられる意味分野のいろいろの語「行く・来る・去る・走る・歩く・帰る・のぼる・つく……」を比べて意味分析するときには、「主体の移動」という意味特徴は弁別の特徴とはならない。しかし

12 あの人は部屋から消えた
あの人⁽⁷⁾は部屋から去った

などの「消える」「去る」を比べると、弁別の特徴になるのである。

ある意味分野に属する語はときとしてお互いに言い替えが可能である。

13 ペンキが手につく
ペンキが手に付着する

14 パンにバターをつける
パンにバターをぬる

言い替え可能だという規準を

A 言い替えても意味的に逸脱した文にならない

B 言い替えても指示されることがらそのものはかわらない

の二つにとれば、言い替えはときとして可能なものであつていつもで

はない。

14' 服にボタンをつける
*服にボタンをぬる

14'' *壁を赤くつける
壁を赤くぬる

また、たとえば「走る」と「歩く」は同じ意味分野に属することができるが、Bの制限によつてほとんどのような文脈においても言い替えができない。

A・Bの制限は恣意的にもうけたわけではない。一般に動詞の意味というとき、その意味特徴は、池上(1972)によれば「統合的特性」と「内在的特性」を認めることができる。Aは「統合的特性」上の制限、Bは「内在的特性」上の制限とだいたいにおいて対応している。意味の研究で、言い替えが可能だというとき、A・Bの規準をもうけるのは適当だろうと考えている。そしてA・Bの制限内で、すべての文脈において言い替えが可能の場合、いわゆる同義語ということができるのだらう。ただし、それは指示の意味に関する限りであつて、価値的・文体的な意味はA・Bの制限の性質上、別扱いにすべきであらう。

同じ意味分野に属するというのは、前述のように一つの意味特徴(それが「統合的特性」であつても、「内在的特性」であつても)をもっているということなのであつて、このことと言い替えとの間には、何らかの必然的な関係があるとは思えない。したがつて言い替え可能な語の意味の集合だけが意味分野をなすわけではないのである。なお言い替えという操作上の概念をめぐつて、意味分野と、指示領域という点から別に検討が必要だらう。

4. 動詞「つく」の多義性

いま「つく」の用例を調べると、慣用的に用いられている「つく」を除けば、大きく三つの意味分野に用いられていることがわかる。

- I 「到着する・とどく・いたる・行く・達する・あがる・帰る」
 などが属する意味分野の「つく」。(主体の移動をあらわす)
 II 「付着する・くっつく・ひっつく・ふれる・とまる・あたる」
 などが属する意味分野の「つく」。(主体の相手との接触をあらわす)

- III 「ともる・点火する・点灯する」などが属する意味分野の「つく」。(主体の発火・発光をあらわす)

それぞれI類・II類・III類と呼ぶことにすれば、I～III類は、かなり離れた意味分野だと言いうことができる。にもかかわらず、実際は「つく」の意味に明瞭な境界線をひくことは困難なのである。

- 15 頭が天井につく

は、先に挙げた例だが、同じような「つく」の意味は

- 16 手が地面につくまで体をまげる

- 17 棒の先が川底につく

などの用例に見出される。前述によれば、これらは「達する」とどく「及ぶ」などと同じ分野に属すと解釈したけれども(したがってI類)、一方で、「ふれる」「あたる」など、接触をあらわす意味分野(したがってII類)に属すとも言えるわけである。

4.1 I 類

これは主体の移動をあらわす意味分野であるが、日本語動詞では

実に多くの動詞がこの意味分野にまとめられる。この意味分野を、移動の段階という点でわければ、「つく」は移動の終了段階をあらわす意味分野に属することになる。

- 18 何とか釜山つてところを抜けて坂を登り、美笛峠について車をとめた。
 (コ・139)⁽⁸⁾

- 19 部落側の岸には各組の男や女が群って待ちうけ伝馬が着くと
 (オ・45)

- 20 私たちが目的の中華料理店の店先につくまでの間(コ・216)

- 21 にもつがなかなか着かないので心配した
 (基・630)

- 22 速達なら今日じゅうにつきます
 (礎・292)

- 23 手が地に着くまで体をまげなさい
 (基・630)

- 24 背伸びしてやっと長押に手がついた
 (礎・292)

これらの「つく」のうち、18～22と23・24の間に意味のちがいが認められるとすれば、それは前述のように23・24が広がりや伸びによる移動をあらわす意味分野に属す「つく」だからであり、18～22はこの意味分野には属さないからである。18～22は『岩波国語辞典』によれば一つの意味として説明されているが、18と20と21・22は少しちがった意味分野にまとめることも可能である。つまり、移動が移動の主体によってなされることをあらわす意味分野と、何か別の力がはたらいて移動することをあらわす意味分野である。いわゆる移動動詞のほとんどは前者に属すが、後者だけの意味分野に属する動詞は「とどく」ぐらいで、あとは「はこばれる」「うつされる」など「れる・られる」の形がついたものである(前者に属する動詞のうちあるものは、後者にも属することがある)。

さて、「つく」が18～22のように使われている場合、23・24とは異

なり、「到着する」との言いかえがほとんどの文脈で可能である。文脈を限定しさえすれば、この意味分野に属する動詞の多くは「つく」と言い替えが可能である。

25 学校に今きいたばかりだ。

学校に今ついたばかりだ。

26 家に帰ったとたん雨が降りはじめた。

家についたとたん雨が降りはじめた。

27 頂上にのぼるまでは安心できない。

頂上につくまでは安心できない。

しかし、これらはどのような文脈でも言い替えが可能ではない。「到着する」は、その点で特別で、場所から場所への移動をあらわす意味分野に属するかぎり、同義語といってさしつかえないだろう。ただ、「到着する」はともかく、「つく」は多義語なので、完全な同義語ではなく「部分的同義関係」(池上(1975) 146P)があると言うべきものだろう。

同じような部分的同義関係は、「つく」と「とどく」の間にも認められる。今度は21・22などの「つく」、つまり別の力がはたらいて移動することをあらわす意味分野に「つく」が使われるかぎり、「とどく」との言い替えがほとんどの文脈で可能だと推察される。もともと「とどく」も多義語なので、当然、この意味分野に属する「とどく」との言い替えに限られる。

このような部分的同義性が、多義語の意味の異同を調べる際にかえるとすれば、18と24は、18と20と21・22と23・24のようにわけることができるが、まだ検討されねばならない問題が多い。

ところでこのI類の「つく」で慣用的に用いられるものがある。

28 座席につくやいなや頬杖を枕に舟を漕ぎだすが (日・77)

29 二三日は床についたまま起きあがることができなかった (オ・183)

「席につく」「座につく」「床につく」などはいわゆる慣用句と言えるかどうか別にしても、「席・座につく」は「すわる」/「床につく」は「横になる」/「病気になる」という意味をすでに含んでいて、単に「ある場所に到着する」/「ただけではない」。

また「つく」が以上述べてきたような空間的な移動から、時間的移動とも考えるレベルに移項して、用いられる場合がある。

30 女性が男性と同じ職業につくのはよいことである (日・134)

31 兵役に就いたことのある者 (ア・125)

これもやや慣用的な用法かと思う。なぜなら「(一)職・職業・(一)務・(一)の任」につく」とは言えるが、おそらくこれぐらいに限られるからである。

「眠りにつく」「帰途につく」「諸につく」も慣用的な用法である。

4.2 II 類

この意味分野に属する「つく」は主体と相手との接触をあらわしていると言えるが、ずいぶん雑多で、したがっていくつかの別の意味分野が錯綜しており、I類のように簡単ではない。

典型的でかつ最も基本的だと思われるのはつぎような「つく」である。

32 彼はその泡盛のグラスをゆっくり傾けひげについた酒の滴を手でぬぐって (コ・23)

33 顔にインクが付いた (基・629)

34 庭の木にむしが付いて、とうとうかれてしまった (基・629)
しかし、実際に用例を集めてみると、このような「つく」はあまり多くない。

この「つく」は「付着する」「くっつく」「密着する」などが属する意味分野に用いられている。表面へのとれなくなるような接触と言えよう。ところが人によっては次のような「つく」と同じ意味とするかもしれない。

35 もし現場の土がやわらかくて車輪のあとがついたら

(オ・199)

36 国立博物館の石の柱や窓枠に白い斑点のような傷跡が無数に
ついていた (コ・213)

この35・36の「つく」主体は、何らかの接触の結果、表面に生じたもので例文のような「あと」の他「しみ・サビ・傷・模様・色・よごれ・しるし」などがあげられる。これらは、32→34のように「つく」主体がものの表面を離れても存在するようなものではないが、私たちが日常、それほど分析的なものの見方をしていないとすれば、「傷」や「あと」などが「インク」や「ホコリ」などと同じように、どこからともなくやってきて物の表面に接触し、そのままそこに残るというイメージができあがる。つまり、分析上あるいは事実上、「傷」「あと」などは「ホコリ」「インク」などと異なるけれども、同じとみなすことが可能で、そのような点で、32→34の「つく」と35・36の「つく」とは同じ意味だとも言えるわけである。もちろん35・36の「つく」は「生ずる」「発生する」「出現する」などと同じ意味分野に属してもいるわけで、だからこそ、この場合の「つく」

の対義語に「きえる」をあてることができるのである。一方32→34の「つく」の対義語として、「きえる」は不適当であり、一般には「とれる」をあてるのが普通だろう(35・36の場合の「つく」の対義語に「とれる」をあてることが可能である)。部分的同義関係と同様に、この対義関係も、意味の異同にどの程度使えるのか、別に検討が必要である。

37 天使の絵を見りやわかる。羽がついてて (コ・68)

38 デパートか何かの紙の袋に紐のついたやつをさげて (コ・122)

39 それは金属のベルトのついたスポーティーな時計で (コ・239)

などの「つく」も32→34の「つく」と同様に「付着する」「くっつく」「ひつつく」と同じ意味分野に属すると言えるため、32→34の「つく」と同じ意味に記述できるだろう。しかし、37→39の「つく」は、他の文脈でもだいたい「ている」または「た」の連体形が後接する形でしかもちいられない。「つく」主体が、その相手の一部分であるため、常に状態でしかあらわせないからである。形態的にはこのように32→34の「つく」とは異なるが、意味分野においても32→34とは別に、「付属する」「付随する」などと同じ意味分野にも属していると言えるわけで、そのように見るならば、

40 (シニアシチズンホームには) 寝室と浴室は別々についている。 (ア・109)

41 (国鉄職員の公舎は) 二戸が背中合わせになっている木造の平屋で小さな庭が申し訳でないについていた。 (コ・189)
の「つく」は、具体的な「表面への接触」という意味特徴もはやも

っていないかもしれないが37↗39と同様「付属する」「付随する」などと同じ意味分野に属していると言ってよいだろう。

42 この教科書にはレコードがつく (基・630)

43 おまけに食事がつくわけやなし (オ・106)

などの「つく」も37↗39と同じように「つく」主体が「つく」相手の一部であることをあらわす意味分野に属すと思われるが、37↗39のように「つく」相手が「つく」主体を必須の部分とした生産物というわけではなく、むしろ、「つく」主体と「つく」相手とがいわば恣意的なワンセットという関係にある。したがって常に状態としてとらえられるというわけではなく、「ている」が必ずしも要求されない。もつとも37↗39の「つく」は目でみることのできるような接触(あるいは組み込み)であり、42・43は関係としての結びつきなので、同じ意味だとすればおかしいという人もいるだろう。それは37↗39では固定された関係であるのに対し42・43での「つく」が新たに付加されるような恣意的な関係をあらわし、「加わる」「付加される」「そえられる」等と同じ意味分野に属するからであるこの意味分野に属する「つく」の他の用例は

44 銀行にあずければ利子が付く (基・630)

45 その金をかりるにはきびしい条件がつく (基・630)

46 投げつけるときにはきつとセリフがつく (オ・196)

などであるが、このように挙げると、また42・43とは異なると思えられるかもしれない。42・43とこの44↗46も「加わる」「付加される」「そえられる」などと同じ意味分野に属しているにはちがいない。しかし、44↗46はもはや「付属する」「付随する」などと同じ意味分野に属することはないだろう。つまり44↗46などの「つく」

は「つく」主体が「つく」相手の一部なのではなく、別に加えられただけのものである。これに対し、42・43は、前述のごとく「付属する」「付随する」などと同じ意味分野にも属することができのであって、42・43と44↗46との間に意味のちがいを感ずるとすれば、このような事情によるのだと考えられる。

さて、44↗46の「つく」がやや抽象化する場合がある。「つく」主体が人の精神生活上の抽象的な名詞であらわされる場合で基本的には、44↗46の「つく」と同じような意味記述が可能かとも思うが、抽象度のちがいがから、別の意味にとられることもあろう。

47 その後疑い深くなった私は生け花があると必ずそつと指で触ってみるくせがついてしまった。 (ア・142)

48 物心つく頃から現在まで「里心がつく」「度胸がつく」「根氣がつく」なども同じだろう。 (ク・135)

これらと非常によく似たものに次のような用例がある。

49 どちらも新世界ではいちばん安くて……いちばん力がつきそうに思えるものであったが (オ・14)

50 酒と肉が体の中に入ってはすみがついてくると (オ・152)
これもまた「加わる」「付加される」などと同じ意味分に属していると言える。

47・48と49・50のあいだにちがひがあるとすれば49・50の方は「加わる」「付加される」と同じ意味分野でありながら、一方では「増加する」「増大する」等と同じ意味分野にも用いられるからだろう。実際、この意味分野の動詞は「に」格をとることがないが、この意味分野に用いられていることがはっきりした「つく」は、「に」格をとることが少いように思われる。また、この意味分野に用いら

れる「つく」には「てくる」「ていく」が後接してアスペクトをあらわすという特徴がある。「だんだん智慧がついてきた」などというときには、この「つく」は「つく」主体の増加をあらわす意味分野に属していると言えるし、「この上、君に余分な智慧がつくとこまる」などと言えは、47・48と同様「加わる」「付加される」と同じ意味分野に用いられていると言えるだろう。「はずみがつく」「力がつく」「自信がつく」「精がつく」などの「つく」も「増加する」「増大する」と同じ意味分野に用いられると言えるけれども、先の47・48の「つく」との差は文脈により、微妙である。

「付着する」「くっつく」「ひつつく」が属する意味分野で「つく」主体が「もの」ではなく「名」になることによって抽象化したレベルに移行していると考えられるものがある。

51 とにかく女と名のつくものにひとつだけ共通していることがある (日・61)

他の用例を見出し得なかったが、「名(前)がつく」は、慣用的だと言つてよいのかもしれない。

「そなわる」「もうけられる」「設置される」等の動詞が属する意味分野、つまり何らかの利益のためにある場所に存在させることをあらわす意味分野に「つく」が属することもある。

52 田んぼの畦くらしいの小道が細々とついている (オ・170)

53 わたしのうちに電話がつきました (基・630)

この意味分野には先に例に出した40・41の「つく」も属するだろう。「今度、私の部屋にテレビがつきました」などというときの「つく」はこの意味分野に用いられていると考えられるが、ホテルの宣伝文句、「テレビつきの部屋」などと言うときには先の40・41の説明で

もあった「付属する」「付随する」などと同じ意味分野に用いられているであろう。

54 二十人ぐらしいの男や女がぞろぞろとうしろについできた (オ・267)

55 タミーは何だかわけがわからずについて走ってきた (オ・267)

56 いぶかりながらついてゆくと (コ・119)

この「つく」は必ず「ていく・てくる・て歩く・て走る・てまわる」などに直接前接するか、「ついで」の形でしか用いられることがない。後者の場合でも後には「いく・くる・歩く」などがあらわれるのが普通である。これは「つく」相手が移動しているからだろう。「追随する」「したがう」などと同じ意味分野に属している。

「つく」相手が移動するので、「接触」とは言えなくても、常に「接近」しておくために「つく」主体も相手の動きに合わせてなければならない。そのような意味特徴をもっていると言えるだろう。この場合にも「つく」相手と「つく」主体との関係は、主と従だと言えるが、移動における主・従ではない場合もある。

57 ぼくは君島先生について歌謡曲の作詞を勉強しだしてから十二年になります (コ・183)

58 重い病人にはだれかうちのものが付くはずだ (基・630)

「つかえる」「したがう」などが属する意味分野に用いられているが、57と58では多少意味の差を感じるかもしれない。57は「つく」相手が、主体よりも強いと思われる場合で、58は、その関係が逆になっている場合である。もともと、「つく」相手か主、「つく」主体が従であるという関係はかわらない。「オレについてこい」など

という場合には、(54) 56と同じ意味にもとれるが、ここでは、「オレ」が移動しないとしておく。前者であって、「師事する」「追従する」などと同じ意味分野、「わたしには神様がついている」という場合には後者で、「味方する」「世話する」などと同じ意味分野に属していると言えよう。

59 なにがどこにあるかまったく見当もつかない (オ・36)

60 下等動物ほど左右の区別がつかないという実験結果がある (日・22)

61 エーゼンシーでも調べがつかねたんですって (ア・175)

62 誰が刑事で誰が刑事でないかは誰にも判断がつかず (オ・186)

これらの例は、見ればわかるように「に」格をとらないのが普通である。そして、「に」格をとるとすれば、それは「つく」相ではなく、精神活動の主である。このような点で単に抽象的に使われているだけではなく、差異がある。この「つく」は多分に慣用的で、意味分野による切り取りがしにくい。「物事が定まる」というような説明がなされるが、それは「つく」についてだけの説明なのではなく(見当・判断・区別・調べ・見分け・想像など)が「つく」という連語になってはじめてわかるものなのである。これらとは少し異ったグループには「收拾がつく」「かたがつく」「恰好がつく」「きまりがつく」などがある。前者は精神活動を示す名詞が「が」格に立ち、後者は事態を示す名詞が「が」格に立つが、もとよりそれぞれそのような名詞がすべて立つわけではない。他にこのⅡ類から派生したと思われる慣用句をあげる。

「足がつく」「目・(鼻・耳・舌)につく」「手につかない」「とりかえしがつかない」「気がつく」

4.3 Ⅲ 類

これは、「ともる」「点火する」「点灯する」「発火する」と同じ意味分野に属する「つく」である。

63 マッチがつくたびに、 (オ・12)

64 灯りがついていて、杏の木の半面を照らしているのである (山・28)

65 二つの詰所の窓に灯がつくのを見た (オ・240)

Ⅰ類やⅡ類の「つく」が、その類のなかでさらに多義であったのに対し、このⅢ類は別の意味分野でいくつかに切り取ることが難しいように思える。しかし、このⅢ類の「つく」を細かく検討してゆくと、「つく」主体のちがいによって、微妙な差異があるかもしれない。つまり、63のように「つく」主体が「マッチ」「ストープ」「懐中電燈」「ラジオ」などの場合には、普通には「に」格をとることがない。ところが「つく」主体が「明かり」「灯」などの場合には、65のように「に」格に場所を示す語がたちうるのである。さらに、「石油(ガス・紙・まき・家……)」に火がつくは、64・65の場合のように「に」格に場所を示す語が立つというわけでもなさそうである。「石油・ガス……」などはむしろⅡ類のように、「つく」相手を示す語と言えるようにも思える。このような差が、「つく」の意味の差になりうるかどうか今のところわからない。Ⅱ類のところでは、32 34のように「つく」主体が個として存在する具体物(ホコリ・インク・虫など)の場合と35・36のように「つく」主体が何らかの接触の

結果表面に生じたもの（あと・傷・しみ・など）の場合とでは、多義とすることも可能だったが、それは異なる意味分野で切り取ることが可能であったからである。ところが、Ⅲ類の場合には、異なる意味分野を設定することができるかどうか、私は今のところ否定的に考えている。

5. やつくり

以上、動詞「つく」を例として多義性というものの一つの考え方を示してきた。4節に示した例で「つく」のすべての意味を尽したわけではないが重要だと思われるものについては、概ね見たつもりである。

さて、本稿ではいわゆる意味記述はほとんどなされていない。もちろん、「つく」の意味記述そのものが本稿の目的ではないからであるが、それよりも意味記述というものが意味特徴によってなされると考えるならば、理論的には、意味差があると仮定された一群の語の比較によって、それぞれの語の意味が記述されると考えるからである。多義語の場合、その内部の一々の意味の異同がはつきりせず、そこで意味記述がどれだけ詳細になされても、それはいわば砂上の楼閣とも言えるだろう。極端な例を示せば、「車が大阪駅につく」と「私が大阪駅につく」とにおいて、「つく」の意味が異なるとすれば、それなりにそれぞれの意味記述ができる、つまり弁別特徴を立てることができるのである。さらに、前者においては自・他の対立を考えることができるが、後者の「つく」は他動詞「つける」と対立しない、というようなことが言える。このようになると「つく」の意味が問題になるのではなく「つける」の意味が問題なのであ

て、「つく」の意味差とは直接的に関係しない。多義語に関して、たとえば実用的な辞書をつくるというような観点からすれば、便宜的に意味をわけて自・他の対応などの関係事項を説明することも可能であろう。しかし、研究上は、便宜的に意味をわけるということ以前に、意味の異同ということがまず問題になろうし、それを避けては生産的な意味の記述ができないだろうと思われる。

本稿で明らかにしたのは、多義性というものが、固定的なものではないということ、さまざまな意味分野に属するものとして現実の文脈で使われるということであった。そして、それは指示的意味に限っての議論であった。いわゆる価値的な意味がどのように多義性とかかわりあうのか、あるいは多義性が固定的なものでないといえれば、意味記述が具体的にどのようなようになされるのが最も生産的なのか、あるいは、すでに触れるところがあったが、意味分野と指示領域からの言い換えの問題など残された問題は多い。また、意味をどのように考えるのかという最も基本的な問題が、いつも意味に関する研究の背後にある。考察したのはほんのわずかであるが、多義性の問題はおそらく意味の本質と密接にかかわり合う問題であり、この稿で述べたことが、一つの手掛りになるだろうと考えている。

注

- 1 たとえば『岩波国語辞典』『日本国語大辞典』『新明解国語辞典』では単義として扱っている。
- 2 このページ数は『意味の諸相』による。
- 3 このページ数は『日本の言語学』5による。
- 4 たとえば『現代英語学辞典』（石橋幸太郎・他編¹⁹⁷³）
- 5 イブセン・トリーア・ヴィスゲルバー以下に論がある。たとえば『現

代ドイツ意味理論の源流』1975

6 ナイダの考える意味分野とは少し異なる。ナイダは意味の世界を過不足なくわけてしまうような意味分野を考えているようだ。つまり任意の意味特徴ではなく、選ばれた特定の意味特徴を共有する意味分野を設定する。しかし、folk taxonomy の存在を考えると、意味の世界を過不足なくわけける意味分野だけでは不十分のように思われる。

以下、例文は実例による。略号のあとの数字はページ数。

7

山…『山椒魚』井伏鱒二、新潮文庫

オ…『日本三文オペラ』関高健、新潮文庫

ア…『淋しいアメリカ人』桐島洋子、文春文庫

コ…『こがね虫たちの夜』五木寛之、角川文庫

日…『日本亭主図鑑』井上ひさし、新潮文庫

以上は小説・評論からであるが、適切な用例がない場合に、次の二点を利用した。

基：『外国人のための基本語用例辞典』（文化庁1971）

礎：『基礎日本語』（森田良行・1977）

文献

池上嘉彦 (1975) 『意味論—意味構造の分析と記述』

奥田靖雄 (1967) 「語彙的な意味のあり方」『教育国語8』（『日本の言語学』1979
第五巻に再録）

国広哲弥 (1968) 「構造的意味論」ことばの宇宙（『意味の諸相』国広哲弥
に再録）

ナイダ・E (1975) 『Componential Analysis of Meaning—an introduction to semantic structures』（意味の構造—成分分析）

ア・S・フランソワ (1977) 監訳

宮島達夫 (1972) 『動詞の意味・用法の記述的研究』

（本学助手）